

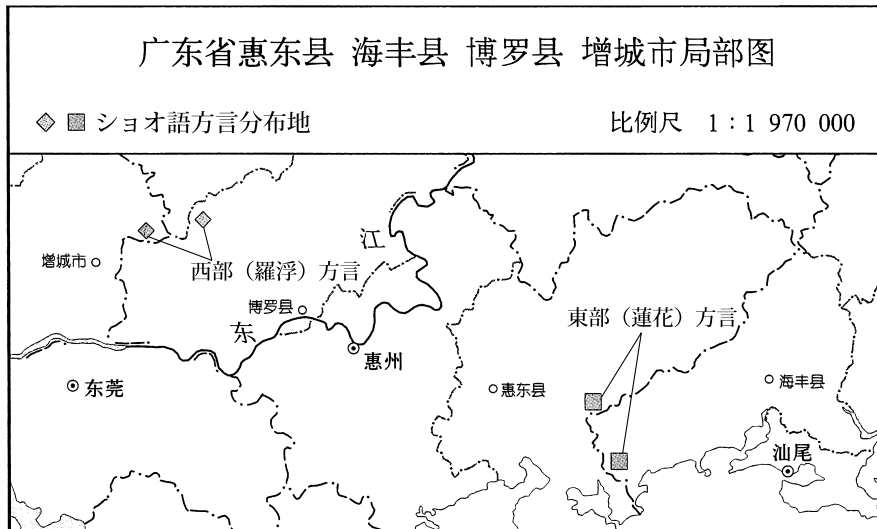
# シヨオ語の所有者表現\*

## —中国南部における地域特徴の残存—

中西 裕樹

### 1. はじめに

シヨオ語（畬語）は、中国広東省東部の海豊県・恵東県・博羅県・増城市に居住するシヨオ族に使用されているミャオ・ヤオ系の言語である。筆者の調査によれば、その話者人口は約 1,000–1,500 人で、シヨオ族総人口<sup>1</sup>に占める割合は 0.1–0.2% 程度に過ぎない。残りの大多数のシヨオ族の使用言語は漢語化し、現在では客家語の下位方言である畬話ないしは居住地域に通用している漢語方言（閩語等）を話している<sup>2</sup>。



《中国語言地図集》第2版 少数民族語言卷（商務印書館）による

\* 本稿の内容の一部は、京大大学人文科学研究所「漢語と周辺諸語の類型構造論」研究班（班長：池田巧教授）の 2013 年 6 月 24 日例会において「シヨオ語の所有者表現—初歩的報告—」と題して発表した。席上、多くのご意見を賜ったことに感謝申し上げます。本稿はその報告を元に、後の現地調査による資料を補い全面的に改稿したものである。

<sup>1</sup> 2010 年の統計によると 708,651 人（中華人民共和国国家統計局編 2013:31）。

<sup>2</sup> シヨオ語と畬話については、前者は「ヤオ族の言語」で後者こそがシヨオ族固有の言語と考える研究者もいる。詳しくは中西（2010a）を参照。

シヨオ語は周囲を漢語方言に囲まれ、漢語諸方言、特に客家語の大きな影響を受けてきた<sup>3</sup>。本稿では、所有者表現についてはシヨオ語が近隣の客家語よりも、むしろ粵語と共通点を持つことを示し、同時にその由来を考察する。なお、ここでいう「所有者表現」は澤田（2006）の用語だが、本稿で扱う内容は Matthews & Yip（1994）の 6.3 Possessive constructions および 6.4 Relative clauses と同等のものである。これを澤田（2006）の分類に則していうと、「グループ3：所有者表現」、「グループ5：名詞的修飾表現」、「グループ6：動詞的修飾表現」をおおむね含んでいる<sup>4</sup>。

## 2. シヨオ語<sup>5</sup>の所有者表現<sup>6</sup>

### 2.1. 所有者を示す構造

海豊シヨオ語では、「遠称指示詞  $\gamma^3$  + 類別詞（量詞）」を所有者の後ろ、指示対象の前に置くことによって所有関係を表す。

- (1) pak<sup>7a</sup> kɿŋ<sup>6</sup>     $\gamma^3$                     t<sup>h</sup>an<sup>4</sup>    me<sup>4</sup>  
 伯父                    DIST-DEM    CLF    馬  
 伯父の馬

「遠称指示詞  $\gamma^3$  + 単数類別詞」の代わりに「a<sup>3</sup>」を使うこともできる。

- (2) pak<sup>7a</sup> kɿŋ<sup>6</sup>    a<sup>3</sup>                                    me<sup>4</sup>  
 伯父                    DIST-DEM+CLF    馬  
 伯父の馬

このことから、「a<sup>3</sup>」は「遠称指示詞  $\gamma^3$  + 単数類別詞」と同義だと考えられる。「a<sup>3</sup>」は所有者と指示対象との関係を示すだけでなく、文の別の位置でも「遠称指示詞  $\gamma^3$  + 単数類別詞」の意味を表すことができる。

<sup>3</sup> Nakanishi & Kwok（2009）を参照。

<sup>4</sup> 「所有 possession」が表す意味概念については、Aikhenvald（2013）および勝川（2013）で詳細な検討がおこなわれている。

<sup>5</sup> 本稿で扱うシヨオ語はすべて筆者の現地調査による海豊シヨオ語である。表記は IPA によるが、いわゆる「寛式記音」で純粋な音韻表記ではない。海豊シヨオ語の音声・音韻の詳細については中西（2003b:1-3）を参照されたい。本稿の表記も基本的に中西（2003b）に従うが、同書で -iŋ と記しているものは本稿では -ixŋ とし、ŋŋ は hŋ と表した。なお、声調は調類を分節音の右肩に記す。各調類の調値は以下の通り。

第1調	第3調	第5調	第7a調	第7b調
22	44	11	22	11
第2調	第4調	第6調	第8a調	第8b調
31	54	35	44	35

<sup>6</sup> 本稿では possessor を「所有者」、possessed entity を「指示対象」と呼ぶ。



- (7) le<sup>3</sup> t<sup>h</sup>aq<sup>4</sup> ts<sup>h</sup>i<sup>4</sup> van<sup>4</sup> a<sup>3</sup> me<sup>4</sup>  
 DEM CLF です 私 DIST-DEM+CLF 馬  
 これは私の馬です

例(6)の「 $\eta i x \eta^1$ 」を「 $\gamma^3$  + 類別詞」にすることができないのは、後者は「 $\gamma^3$ 」(あれ)によって前方照応しつつ後ろの名詞を修飾するというのがその役割であり、後にも触れるが指示機能が多少なりとも残存しているからだと考えられる。逆に(7)のように後ろに指示対象名詞が存在する場合には通常「 $\eta i x \eta^1$ 」は使わない。また、(7)では「 $\gamma^3$  + 類別詞」よりも「 $a^3$ 」が好まれるが、これは同じ馬を指すのに「 $\gamma^3$ 」を使うと「 $a^3$ 」よりも「あの」という指示的意味がクローズアップされ、指示対象までの距離において主語の「le<sup>3</sup>」(これ)と矛盾を来すからであろう。なお、「ここに馬がいて、それは自分のものである」という意味内容を表現する文としては、(7)よりも(6)が好まれる。たとえ「 $a^3$ 」を使っても(7)は無理がある文なのかも知れない。

所有者や指示対象が有生物でも無生物でも、所有者表現の構造には変化がない。ただ、所有者が人称代名詞で指示対象が親族名称の場合には、漢語同様に所有者と指示対象をそのまま並べることで所有関係を表すことができる。

- (8) van<sup>4</sup> a<sup>1</sup> me<sup>6</sup>  
 私 母  
 私の母

## 2.2. 関係節

所有者の部分に動詞を含むとき(関係節)には、「 $\gamma^3$  + 類別詞」の前にさらに構造助詞の「 $\eta i x \eta^1$ 」が出てくることが多い。

- (9) l $\eta$ <sup>4</sup> m $\alpha$ <sup>4</sup>  $\eta i x \eta^1$   $\gamma^3$  ti<sup>1</sup> ka<sup>3</sup> h $\gamma$ <sup>5</sup>  
 3SG 買う PRT DIST-DEM PL-CLF もの  
 彼(女)が買ったもの

これはシヨオ語には形態変化がなく、また「 $\gamma^3$  ti<sup>1</sup>」はそれだけでは「あれらの」という意味であるため、「 $\eta i x \eta^1$ 」がないと「彼(女)はあれらのものを買う」と同義になってしまうからであろう。

- (10) l $\eta$ <sup>4</sup> m $\alpha$ <sup>4</sup>  $\gamma^3$  ti<sup>1</sup> ka<sup>3</sup> h $\gamma$ <sup>5</sup>  
 3SG 買う DIST-DEM PL-CLF もの  
 彼(女)はあれらのものを買う  
 ? 彼(女)が買ったもの

「買ったもの」を主語として後ろに述部が続く場合には「 $\eta i\chi\eta^1$ 」はなくても成立する。「 $\eta i\chi\eta^1$ 」が出てくることもあるが、出てこないことの方が多い。

- (11)  $m\chi\eta^2$   $tsa^5$   $l\sigma^1$     $m\sigma^4$   $\chi^3$  \_\_\_\_\_  $ti^1$     $ka^3$   $h\chi^5$     $ts\chi\eta^5$     $pa^4$     $h\eta^4$   $\sigma^3$  ?  
 2SG   昨日   買う   DIST-DEM   PL-CLF   もの   置く   どこ   行く   PFV  
 君が昨日買ったものはどこに置いたの？

コンサルタントによると以下(12)の形式も可能とのことだが、そうすると(9)中の「 $\chi^3$   $ti^1$ 」は所有者と指示対象の関係を表しているというよりも、本来の指示機能が表面化しているのとらえた方が良いのかも知れない。

- (12)  $l\chi\eta^4$     $m\sigma^4$     $\eta i\chi\eta^1$     $ka^3$   $h\chi^5$   
 3SG   買う   PRT   もの  
 彼(女)が買ったもの

ただ、ショオ語話者にとって、指示対象の前に「 $\eta i\chi\eta^1$ 」を用いるのはそれほど好ましいことではないらしく、(11)のように後ろに述部が伴われる場合には(12)に見られる「 $\eta i\chi\eta^1$ 」のみの形式は決して選択されない。同時に「彼(女)が買ったもの」の場合でも何度も質問されているうちに(10)のような「 $\chi^3$  + 類別詞」だけの形式を認めてしまうこともある。ちなみに、物語は比較的自然的な発話といえるが、中西(2003a)所収の三篇の物語には所有者表現の指示対象の前に「 $\eta i\chi\eta^1$ 」を使う例は見られない。「 $\eta i\chi\eta^1$ 」を使うのは文体的にかたい表現なのだろう。

2.1. でも触れたが、「 $\chi^3$ 」が元来遠称指示詞であるため、「 $\chi^3$  + 類別詞」は近称指示詞と相性が悪い。「あの」と「この」が同一物を指し示すことになると指示対象までの距離に矛盾が生じるので、関係節でも近称指示詞が含まれる場合は「 $\chi^3$  + 類別詞」ではなく「 $\eta i\chi\eta^1$ 」が使われる。

- (13)  $sin^3$   $sian^6$     $sia^3$     $\eta i\chi\eta^1$     $le^3$     $ti^1$     $t\sigma^3$   
 先生   書く   PRT   DEM   PL-CLF   本  
 先生が書いたこれらの本

例(13)では「 $\eta i\chi\eta^1$ 」がなければ、文意が「先生はこれらの本を書く」に変わってしまうため、当然省略することができない。また「 $le^3$  + 類別詞」は「 $\chi^3$  + 類別詞」と違い所有者と指示対象との関係を示す機能を備えていないため、以下の(14)のようにこの名詞句を主語として後ろに述部が伴われる場合であっても、「 $\eta i\chi\eta^1$ 」は省略できない。

- (14) sin<sup>3</sup>sian<sup>6</sup>    sia<sup>3</sup>    ŋixŋ<sup>1</sup>    le<sup>3</sup>    ti<sup>1</sup>    tɔ<sup>3</sup>    khe<sup>4</sup>    ŋɔŋ<sup>5</sup>    mo<sup>6</sup>  
 先生        書く    PRT    DEM    PL-CLF    本        とても    良い    見る  
 先生が書いたこれらの本はとてもおもしろい

しかしながら、上述のように「ŋixŋ<sup>1</sup>」を使った文は文体的にかたいせい、あまり使われず、例(13)や(14)も通常の発話の中では現れない可能性が高い。例えば(14)は、「これらの本は先生が書いた。とてもおもしろい」のような表現がより好まれる。

所有者が人称代名詞で後ろに動詞を伴わない場合は「le<sup>3</sup> + 類別詞」も可能であるが、これは標準漢語で「我這本書」「我這些書」が許容されるのと同様の現象であろう。

- (15) van<sup>4</sup>    le<sup>3</sup>    ti<sup>1</sup>    tɔ<sup>3</sup>  
 私        DEM    PL-CLF    本  
 私のこれらの本

### 3. ミャオ・ヤオ諸語の所有者表現

前章では、ショオ語の所有者表現の概略を共時的に記述した。その由来を探るために、本章ではまず同系統に属するミャオ・ヤオ諸語における所有者表現を概観する。

#### 3.1. 類別詞を使うミャオ・ヤオ諸語

筆者が参照することのできた資料によると、所有者表現に類別詞を使うミャオ・ヤオ諸語としてミエン語標敏方言とミャオ語川黔滇方言とが挙げられる。ミエン語標敏方言では、所有関係を表すのに通常は類別詞を用い、指示対象が特定の類別詞を持たない名詞の場合には構造助詞の「nin<sup>2</sup>」が使われる(毛 2004:263–264)。

- (16) nin<sup>2</sup>    no<sup>1</sup>    ɱin<sup>1</sup>    hoŋ<sup>2</sup>    kwən<sup>7</sup>  
 3SG    CLF    顔        赤い    PFV  
 彼(女)の顔が赤くなった

- (17) ta<sup>3</sup>    nin<sup>2</sup>    koŋ<sup>3</sup> pəu<sup>1</sup>    a<sup>7</sup>    njen<sup>3</sup>  
 1PL    PRT    仕事        とても    多い  
 私たちの仕事はとても多い

以下のように、一部の文では類別詞と構造助詞の双方を使うことができる。

(18a) nin<sup>2</sup>    phin<sup>3</sup>    lwəi<sup>1</sup>    lje<sup>4/6/8</sup> the<sup>3</sup>    kwən<sup>7</sup>  
          3SG    CLF    服    汚い    PFV

(18b) nin<sup>2</sup>    nin<sup>2</sup>    lwəi<sup>1</sup>    lje<sup>4/6/8</sup> the<sup>3</sup>    kwən<sup>7</sup>  
          3SG    PRT    服    汚い    PFV  
          彼の服は汚れた

この言語では、類別詞を使う場合でも遠称指示詞が伴わない点がショオ語とは異なる。指示対象が特定の類別詞を持たない名詞のときに、標準漢語の「個」のような汎用性の高い類別詞は使われないのか、また、構造助詞が使われるのは類別詞的に使われているのかどうか、類別詞と構造助詞を共に使えるのはどのような場合かなど、毛（2004）の記述からは不明なことも多い。

李（2008:187）の記述によると<sup>7</sup>、同じミエン語標敏方言の関係節では、以下のように類別詞ではなく構造助詞の「nin<sup>31</sup>」が使われる。

(19) wə<sup>35</sup>    tau<sup>31</sup>    sa<sup>53</sup>    tu<sup>53</sup>    nin<sup>31</sup>    wə<sup>35</sup>    phin<sup>35</sup>    lwəi<sup>33</sup>  
          DIST-DEM    CLF    女の子    着る    PRT    DIST-DEM    CLF    服  
          あの女の子が着ているあの服

ミャオ語川黔滇方言では、以下のように所有者表現に類別詞を使う（李2008:172）。

(20) ni<sup>21</sup>    to<sup>21</sup>    to<sup>43</sup>    to<sup>21</sup>    no<sup>31</sup>    i<sup>55</sup>  
          3SG    CLF    息子    CLF    牛    DIST-DEM  
          彼（女）の息子のあの牛

(21) o<sup>55</sup>    to<sup>43</sup>    la<sup>31</sup>    i<sup>31</sup>  
          1SG    CLF    田    DIST-DEM  
          私のあの田んぼ

上の例にはともに遠称指示詞が含まれているが、(20)の「彼（女）の」という部分には指示詞はないので、このミャオ語方言では、指示対象が人の場合には類別詞のみで所有関係を表すことができるのかも知れない。また、(21)は標準漢語で「我那塊田」が許容されるのと同様で、(20)とは性質が違うようにも

<sup>7</sup> 李（2008）からの引用では、声調表記は原書にしたがい調値による。遠称指示詞「i」には例文によって異なる調値が付されていることがあるが、原書のままである。例文の日本語訳の「あの」は原書の漢語グロス「那」を反映させたものである。

見える。

この言語もミエン語標敏方言と同じように、関係節では助詞<sup>8</sup>を使う（李2008:186）。

- (22) to<sup>21</sup>    no<sup>31</sup>    kə<sup>33</sup>    qhau<sup>55</sup>    mua<sup>21</sup>    lo<sup>21</sup>    i<sup>44</sup>  
 CLF    牛        PRT    ばかり    買う    来る    DIST-DEM  
 買ってきたばかりのあの牛

以上の二言語のほか、プヌ語では、通常構造助詞を使うが一部類別詞を用いる所有者表現（関係節を含む）も存在する（蒙2001:123–124, 136, 139）。また、李（2008:187）によると、キョンナイ語やパフン語の関係節では、一部「遠称指示詞＋類別詞」を使うことも可能なようである。このように所有者表現に類別詞を使うミャオ・ヤオ諸語は中国南部に広がっているが、その用法には言語・方言ごとに異なる部分があり、それぞれの言語・方言で独自の発展を遂げたことがわかる。

### 3.2. 構造助詞を使うミャオ・ヤオ諸語

現在のミャオ・ヤオ諸語では、多くの言語・方言において所有関係を示すのに構造助詞を使う。その概要は表1のとおりである。

各言語・方言における用法の詳細は紙幅の関係で依拠資料に譲るが、これらの言語・方言では本稿の例(7)のように所有者と指示対象が明示される場合も、(6)のように指示対象が省略される場合も同じ構造助詞を使用するという点で海豊ショオ語とは異なる。これは大部分の漢語方言（標準漢語を含む）と同様であり、漢語の構造が拡散したことによる可能性が高い。

表1に示された構造助詞には、語頭子音が鼻音のものと、声調が第一声調（A調を含む）ないしは第三声調であるものが多いことが注目される。ショオ語の「ŋixŋ」もこの条件に当てはまる。現在の音声形式からはすべての言語・方言の間で厳密な音韻対応を見いだすことは困難だが、祖語の段階から存在したものである可能性はある。ショオ語は多くの研究者からキョンナイ語と最も近い関係にあるとされているので<sup>9</sup>、ショオ語の「ŋixŋ」とキョンナイ語の「ðjəŋ」<sup>1</sup>とが音韻対応するかどうか、以下で検討する。

声母の対応は、表2に示した。構造助詞のほかは、キョンナイ語のð-がショオ語のt-にきれいに対応している。Ratliff (2010:52)は、表2に見られる語のうち「深い」と「翼」について、ミエン系言語において有声閉鎖音で現れながらも、ミャオ系言語において通常の前鼻化音ではなく口音の閉鎖音で出てくることから、音節の前に鼻音が“loosely-adjoined”された再構形を提案した。例えば、「翼」には \*N-tat という形式を再建している。キョンナイ語の声母がt-ではなくð-

<sup>8</sup> 田口（2008）所収のミャオ語川黔滇方言の構造助詞「mo^」とは異なる。

<sup>9</sup> たとえば毛・李（2002:253）、Ratliff（2010:3）など。



言語・方言		構造助詞	依拠資料
ミャオ語	湘西 <sup>10</sup>	naŋ <sup>3</sup>	金 (2011)
	黔東	paŋ <sup>8</sup>	王主編 (1985)
	川黔滇	mo <sup>A</sup>	田口 (2008)
プヌ語 <sup>11</sup>		ti <sup>1'</sup> (的) ven <sup>6</sup> (份)	蒙 (2001)
パフン語		ŋ <sup>3/4/8</sup> ti <sup>3/4/8</sup> (的)	毛・李 (1997)
ジョウノ語		kə <sup>6/8</sup>	毛・李 (2007)
キョンナイ語		ðjɔŋ <sup>1</sup>	毛・李 (2002)
ミエン語	勉	nei <sup>1</sup>	毛等編著 (1982)

表1 ミャオ・ヤオ諸語の構造助詞

意味	シヨオ語	キョンナイ語
[構造助詞]	ŋixŋ <sup>1</sup>	ðjɔŋ <sup>1</sup>
深い	ka <sup>1</sup> tv <sup>1</sup>	ðu <sup>1</sup>
尻尾	ka <sup>1</sup> to <sup>3</sup>	ðau <sup>3</sup>
翼	ka <sup>1</sup> te <sup>6</sup>	ðe <sup>7</sup>
長い	ka <sup>1</sup> ta <sup>3</sup>	ða <sup>3</sup>

表2 シヨオ語とキョンナイ語の声母の対応

あるのもこの鼻音が作用して有声化したものと解釈できる。この再構形を採用するならば、シヨオ語についても、構造助詞では何らかの理由で鼻音が残ったと考えることも可能だろう。構造助詞以外の語がすべて ŋ- と同じ調音位置の k- を語頭子音とする接頭辞を伴った形で出てくるのも示唆的である。

韻母の対応は、以下の表3に示す。キョンナイ語の -ɔŋ 韻母に対応するシヨオ語の同源語は二例しか見つからなかったが、声母・声調と共に整然とした対応を見せている。構造助詞の韻母についていうと、海豊シヨオ語の -xŋ 韻母は \*-uŋ から来ているから<sup>12</sup>、恐らく元々は \*ŋiɔŋ のような形だったものが、主母音の前 (\*ŋi-) と後ろ (\*-ŋ) が共に開口度の小さい音であるため、発音の便宜上、主母音もそれに同化して \*ŋiɔŋ > \*ŋiuŋ というような変化が起こったのだろう<sup>13</sup>。

<sup>10</sup> ミャオ語湘西方言では、構造助詞の「naŋ<sup>3</sup>」のほかに、nominalizer (“名物化助詞”)の「ma<sup>2</sup>」が存在する(金 2011:168-169, 239-241)。これは川黔滇方言の「mo<sup>A</sup>」と同源かも知れない。

<sup>11</sup> ven<sup>6</sup>は類別詞と考えるべきかも知れない。

<sup>12</sup> 中西 (2010b) 参照。

<sup>13</sup> 平行例として「ŋixŋ<sup>1</sup>」(欲しい, 必要である, ~しなければならない)がある。中西 (2010b) 参照。

意味	シヨオ語	キョンナイ語
[構造助詞]	ŋiɣŋ <sup>1</sup>	ðjɔŋ <sup>1</sup>
細い	sɔŋ <sup>1</sup>	θjɔŋ <sup>1</sup>
葉	piɔŋ <sup>2</sup>	mplɔŋ <sup>2</sup>

表3 シヨオ語とキョンナイ語の韻母の対応

以上のように、シヨオ語とキョンナイ語の構造助詞は、声母・韻母・声調すべてが音韻対応している。つまり、シヨオ語の「ŋiɣŋ<sup>1</sup>」は少なくとも「シヨオ・キョンナイ祖語」にまで遡ることができることになる。声母に Ratliff 氏の再構形を適用するならば、シヨオ・キョンナイ祖語の構造助詞は \*N-tjɔŋ<sup>1</sup> という形式であったと推定される。「ŋiɣŋ<sup>1</sup>」が所有者表現に使用されていたかはともかく、比較的古い歴史を持っていることは間違いない。

#### 4. 粵語の所有者表現と中国南部における地域特徴の残存

シヨオ語分布地域の近隣で、所有者表現に「遠称指示詞+類別詞」という構造を用いる言語としてすぐに思い浮かぶのは粵語である。Matthews and Yip (1994) によると香港粵語では、所有を表す表現や関係節に「遠称指示詞+類別詞」と構造助詞とを共に使うことができる。両者の違いは文体の違いに起因し、前者がより口語的で使用範囲も広い。例えば「私の本」は次の三通りの言い方が可能である<sup>14</sup>。

(23) 我 啲 \_\_\_\_\_ 本 書  
私 DIST-DEM CLF 本

(24) 我 本 書  
私 CLF 本

(25) 我 嘅 書  
私 PRT 本

このうち(25)がよりフォーマルな言い方で、他の二つは口語的である。シヨオ語と異なるのは、構造助詞を使うことができることと類別詞を用いる際に(24)のように遠称指示詞を伴わなくても良い点である(シヨオ語では(24)(25)のような言い方は不可)。

粵語とシヨオ語の所有者表現の共通点として興味深いのは、2.2. で述べたよう

<sup>14</sup> 粵語の所有者表現については、香港教育学院の片岡新氏に多くのご教示を受けた。記して感謝申し上げます。

に、ショオ語の関係節においても構造助詞の「ɲiɲɲ」を使うと文体的にかたい表現になるということである。これは、ショオ語でも粵語でも構造助詞を使う表現は外部からの借用であることを示唆していると言えまいか。Bauer & Matthews (2003:153) には、以下のような指摘がある。

In the syntax of classifiers, as in some other respects, Cantonese resembles the neighbouring Tai and Hmong-Mien languages: for example, the classifier possessive construction illustrated above is shared with Hmong.

所有者と指示対象を「遠称指示詞＋類別詞」（語順は異なる場合もありうる）でつなぐという構造は、中国南部のミャオ・ヤオ諸語の多くに共有されていた古い特徴の残存であり、これが古粵語にも伝播したのではないだろうか。粵語の基層にタイ系言語の存在が認められている<sup>15</sup> ことと Bauer & Matthews (2003) の指摘を考え合わせると遠称指示詞と類別詞の組み合わせによる所有者表現は、タイ・カダイ諸語とも共有していた可能性もある<sup>16</sup>。この場合には、古粵語に「伝播」ではなく、「残存」したということになる。

他の多くの点で漢語化（特に客家語化）が進んでいるショオ語が所有者表現においてのみ保守的であるとはやや考えにくいのだが、元々構造助詞を使っていたところに、粵語から「遠称指示詞＋類別詞」構造を借用し、さらにそこに構造助詞を使う構造が外部から侵入しつつあるというシナリオはより想定しづらい。漢語からショオ語への借用は大部分が客家語を通して行われており<sup>17</sup>、また、この仮説では他の漢語諸方言にあまり見られない形式がなぜ粵語および少数の南方漢語にのみ存在する<sup>18</sup>かを説明することもできないからである。3.1. で述べたようにミャオ・ヤオ諸語の一部には現在でも「遠称指示詞＋類別詞」構造が存在しており、同時にミエン語標敏方言と香港粵語では遠称指示詞を省略できる。これらのことから、構造助詞を使う表現による外部からの浸食が起こるとともに、それまで広く分布していた「遠称指示詞＋類別詞」構造がそれぞれの言語で変容していった結果、現在のような形になったと推測されるのである。言語によっては、「遠

<sup>15</sup> 例えば、橋本 (2000:151-155)、Bauer & Matthews (2003) など。ただし、橋本は「基層」という用語は使っていない。

<sup>16</sup> 初歩的な調査として、『中国少数民族語言簡誌叢書 修訂本・卷参』所収のタイ・カダイ系 10 言語の記述を確認してみた。所有者表現に関連して以下の例が注目に値する。一、ブイ語（布依）の関係節では、類別詞と指示詞（遠近ともに可）の組み合わせによって所有関係を表す（132 頁）。二、ラッキヤ語（拉珈）では、所有者が人称代名詞や人を表す名詞の時には、指示対象との間に類別詞を置いて所有関係を表す。ただし、類別詞は省略も可能（254、257 頁）。三、ムーラム語（仂佬）では、類別詞と遠称指示詞の組み合わせで所有関係を表すことがある（592-593 頁）。これらが上述のミャオ・ヤオ諸語に見られる「遠称指示詞＋類別詞」と同様の性質をもつものかどうかは、更なる調査および検討が必要である。

<sup>17</sup> 海豊ショオ語の最も近くに位置する海豊県鵞埠鎮の客家語では、所有者表現には構造助詞を使い、「遠称指示詞＋類別詞」は用いない（コンサルタントは 60 歳代の男性）。しかし、同じ広東省の揭西客家語および海豊閩南語では、所有者表現に用いられる構造助詞と、最も常用される類別詞とがともに「個」であり（李、張 1992、羅 2000）、所有者表現に類別詞が使われているようにも見える。ただし、依拠資料の記述からは用法等の詳細はわからない。

<sup>18</sup> たとえば、蘇州語でも関係節に類別詞が用いられる。蘇州語では指示詞は伴わず、また「動詞＋類別詞」の後で指示対象を省略できる（劉 2005）。

称指示詞+類別詞」構造は完全に消滅し、構造助詞に取って代わられることになった。構造助詞を使う構造が拡散していく際に、構造助詞の形式そのものは元々各言語に存在したものが使われたため<sup>19</sup>、ショオ語ではショオ・キョンナイ祖語の段階から持っていた「 $\eta i\eta\eta^1$ 」を使用するようになったのである。

中国の少数民族言語は多くの言語・方言に『簡誌』シリーズが刊行されており、音韻・語彙・文法について概観できるようになっている。近年は「中国新発見語言研究叢書」シリーズや「参考語法」(レファレンス・グラマー)も陸続と出版されている。漢語諸方言も今世紀に入ってから、調査・報告される地点が飛躍的に増えてきている。しかしながら、記述が不十分な点は少なからず存在し、所有者表現もそのひとつであると言えよう。本稿の仮説を検証するためにも、今後は、漢語諸方言、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語の多くの言語・方言にわたって、より詳細な文法記述が求められる。

## 5. 余論

ここまで、海豊ショオ語の所有者表現の概略を記述し、その由来について考察してきた。最後に、関連する問題として「遠称指示詞+単数類別詞」の文法化について指摘しておきたい。

本稿第二章では、この構造中の遠称指示詞の指示性の表面化について触れたが、ここに単数類別詞が関わってくることがある。調査時に「私の本」という表現を尋ねたところ、「遠称指示詞+単数類別詞」を使った言い方としては以下の回答があった。

- (26)  $van^4$   $\chi^3$  \_\_\_\_\_  $lan^1$   $to^3$   
私 DIST-DEM CLF 本  
私の本 (単数)

類別詞に「 $lan^1$ 」という最も常用されるもの(標準漢語の「個」に相当)が出てきたので、書籍専用の類別詞「 $ph\eta\eta^6$ 」に替えることができるか尋ねると、それでは「私のあの本」になってしまうということであった。これとは逆に「私の言語学の本」は「遠称指示詞+単数類別詞」を使うと、以下(27)の表現が可能であり、「 $lan^1$ 」という類別詞はあまり好ましくないという。

<sup>19</sup> 通言語的に、grammatical form そのもの(ここでは例えば標準漢語の「的」)よりも grammatical category や construction type (ここでは構造助詞を使う構造)の方が拡散しやすい(Dixon 1997:20-22)。もっとも、優勢言語との接触が進むにつれ、本稿表1中のプヌ語やバワン語のように、優勢言語の grammatical form そのものを借用する例も出てくる。

- (27) van<sup>4</sup> x<sup>3</sup> \_\_\_\_\_ phɤŋ<sup>6</sup>    ŋi<sup>3</sup> ŋin<sup>6</sup> hok<sup>8a</sup>    tɔ<sup>3</sup>  
 私        DIST-DEM    CLF        言語学        本  
 私の言語学の本（単数）

例(26)では、所有者が「私」であり、自分の持ち物については良く知っているため、「phɤŋ<sup>6</sup>」という量詞を使うと指示性が強くなりすぎてしまうのかも知れない。逆に(27)では「私の」「言語学の」というようにすでに二つの修飾語によって指定されているために、「laŋ<sup>1</sup>」という一般的な類別詞だと却って指示性を薄めることになり奇妙な感じがするのだろう。どのような場合に指示機能がより強く表面化するのかについては更なる調査が必要だが、いずれにしても、この構造が完全に文法化していないことを示すものである。これは指示詞の指示範囲や機能とも関わってくる問題であり、今後の課題としたい。

## 略号

1SG	一人称単数代名詞	DIST-DEM	遠称指示詞
1PL	一人称複数代名詞	NEG	否定辞
2SG	二人称単数代名詞	PFV	完了
3SG	三人称単数代名詞	PL-CLF	複数類別詞
CLF	類別詞	PRT	助詞
DEM	近称指示詞		

## 参考文献

- 陈其光. 2001.《巴那语概况》民族语文 2001 年第 2 期: 69-81 页。  
 姬安龙. 2012.《苗语台江话参考语法》昆明: 云南民族出版社。  
 李如龙, 张双庆主编. 1992.《客赣方言调查报告》厦门: 厦门大学出版社。  
 李云兵. 2008.《中国南方民族语言语序类型研究》北京: 北京大学出版社。  
 刘丹青. 2005.《汉语关系从句标记类型初探》中国语文 2005 年第 1 期: 3-15 页。  
 罗志海. 2000.《海丰方言词典》乌鲁木齐: 新疆人民出版社。  
 毛宗武. 2004.《瑶族勉语方言研究》北京: 民族出版社。  
 毛宗武, 李云兵. 1997.《巴哼语研究》上海: 上海远东出版社。  
 毛宗武, 李云兵. 2002.《炯奈语研究》北京: 中央民族大学出版社。  
 毛宗武, 李云兵. 2007.《优诺语研究》北京: 民族出版社。  
 毛宗武, 蒙朝吉. 1982.《博罗畲语概述》民族语文 1982 年第 1 期: 64-80 页。  
 毛宗武, 蒙朝吉. 1986.《畲语简志》北京: 民族出版社。  
 毛宗武, 蒙朝吉, 郑宗泽编著. 1982.《瑶族语言简志》北京: 民族出版社。  
 蒙朝吉. 2001.《瑶族布努语方言研究》北京: 民族出版社。  
 田口善久. 2008.《罗泊河苗语词汇集》东京: 东京外国语大学。  
 王辅世主编. 1985.《苗语简志》北京: 民族出版社。

- 闻 静. 2013.《壮侗语族“的”字结构的类型学特征》语言研究第 33 卷第 1 期：121-127 页。
- 向日征. 1991.《吉卫苗语研究》成都：四川人民出版社。
- 余 金枝. 2011.《湘西矮寨苗语参考语法》北京：中国社会科学出版社。
- 郑 宗泽. 2011.《江华勉语研究》北京：民族出版社。
- 《中国少数民族语言简志》编委会，《中国少数民族语言简志丛书》修订本编委会. 2009.《中国少数民族语言简志丛书 修订本·卷参》北京：民族出版社。
- 中华人民共和国国家统计局编. 2013.《中国统计年鉴—2013》北京：中国统计出版社。
- 中西 裕树. 2003a.《畲语海丰方言故事四则》北野浩章編『論集：東・東南アジアの少数民族言語の現地調査 3』ELPR Publications Series A3-016: 119-154 頁。
- 中西 裕树. 2003b.《畲语海丰方言基本词汇集》京都：京都大学人文科学研究所。
- 中西 裕樹. 2010a.《論畲話的歸屬》張洪年, 張雙慶主編《歷時演變與語言接觸—中國東南方言》*Journal of Chinese Linguistics Monograph Series Number 24*: 247-267 頁。
- 中西 裕樹. 2010b.《从原始畲语到现代畲语的一些音变》同志社大学言語文化学会『言語文化』第 13 卷第 1 号：19-53 頁。
- 橋本萬太郎. 2000.「言語類型地理論」『橋本萬太郎著作集第一卷』東京：内山書店。29-190 頁。(もと単行本, 1978 年弘文堂刊)
- 勝川裕子. 2013.『現代中国語における「領属」の諸相』東京：白帝社。
- 澤田英夫. 2006.「名詞句構成要素の分類」東南アジア諸言語研究会編『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』3-4 頁。東京：慶應義塾大学言語文化研究所。
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2013. Possession and ownership: a cross-linguistic perspective. In Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.), *Possession and Ownership A Cross-Linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press. 1-64.
- Bauer, Robert S. and Stephen Matthews. 2003. Cantonese. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*. London and New York: Routledge. 146-155.
- Dixon, R. M. W. 1997. *The rise and fall of languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Luo, Yongxian. 2013. Possessive constructions in Mandarin Chinese. In Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.), *Possession and Ownership A Cross-Linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press. 186-207.
- Matthews, Stephen and Virginia Yip. 1994. *Cantonese: A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Nakanishi, Hiroki and Bit-chee Kwok. 2009. Evolution of the initial consonants in the She language induced by contact with Hakka. *Journal of Chinese Linguistics* 37-2: 207-226.
- Ratliff, Martha. 2010. *Hmong-Mien Language History*. Canberra: Australian National University.

[附記] 本稿は『東方學研究論集』164-180 頁に掲載した論考を再録したものである。再録にあたり誤植の修正を行い、言語分布図を付した。